

恋心を吟ずる〈訳詞〉の解説

—インターネット時代の鑑賞—

田所 光男

はじめに

音楽を聴く仕方も時代によって変化して、最近の特徴の一つは、インターネットを経由して、買ったり聴いたりするが機会が多くなったことではないでしょうか。¹⁾ いつでもどこでも、また何でも聴けて、古い歌か新しい歌か、外国の歌か自国の歌か、というような区別も、今ではさほど重要なものではなくなってしまったのではないのでしょうか。また、歌や歌手についての情報も大量にかつ簡単に入手でき、どう聴いているのか、どう聴いたらいいのか、などという、以前でしたら友人とのおしゃべりを除けばあまり話題にのぼりにくかった、鑑賞に関わる内容も、今日では個人のブログや匿名の書き込みなどを通して、簡単に知ることができます。

私自身、ネット上をサーフしながら、「こんな奴がいるんだ?!」とか、一人で楽しむことができますが、たまたまそうした時、自分の書いたものがネット上で情報源として使われていることを発見しました。私は普段ブログとか書き込みなどはしませんが、今日はここであえて書き込み的な反応をして、皆さんの、改めての反応をお待ちしたいと思います。

具体的にはフランスの曲に日本語を載せた恋の歌を取り上げます。外国の歌なのか日本の歌なのか、微妙な領域に生きている歌です。『古今和歌集』の仮名序で紀貫之は、「やまと歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞ、なれりける」と書きましたが、これは決して「やまと歌」に限られることではありませんね。これから取り上げる、外国のものとも日本のものとも言いかねる、現代のインターカルチュラルなポピュラーソングも、「言の葉」として、複数の文化的な文脈を下地に、やはり多くの「人の心」につながっています。

1. 「恋ごころ」をめぐるアナーキー

さて、2006年文化庁などが主催して「親子で歌いつごう日本の歌百選」とい

う公募が行われ、中島みゆきの「時代」とか、さだまさしの「秋桜」など、現在も活躍中のミュージシャンの歌も入りましたが、「春がきた」とか「われは海の子」などのような、いつ頃の歌なのかよくからないものも多数選ばれました。例えば「われは海の子」ですが、そこでは、気持ちの良い浜辺の情景が歌われていて、エコで、現代的だな、とも思われるわけですが、しかしこの歌は実は7番まであって、3番までは浜辺にいる「海の子」もだんだん大きくなって、4番からは海に出て行きます。そして最後どうなるかと言いますと、

いで大舟を乗出して
我は拾わん海の富
いで軍艦に乗組みて
我は護らん海の国

文語調の言葉も含めて、ある時代が感じられます。富国強兵の時代の歌かな、とどなたも想像なさると思いますが、まさにその通りで、これは明治43年の最初の文部唱歌の一つです。

このように、歌詞を読んでそこから時代を見抜いて行く、というのは結構おもしろいのですが、しかし難しい場合も多く、そこでいろいろなウェブ・サイトが活躍する、むしろ暗躍する余地も出てくるわけです。

「恋ごころ」という歌を取り上げてみましょう。YouTube「岸洋子 恋心」の投稿者は、次のように書いています。²⁾

エンリコ・マシアスが創唱。シャンソン、タンゴの名曲として知られています。
日本では昭和40年に越路吹雪、岸洋子、菅原洋一らの競作ヒット。もっとも評判が高かったのが、この岸洋子盤でした。

この方が、「もっとも評判が高かった」という岸洋子のバージョン（訳詞：永田文夫）の冒頭は以下の通りです。

恋はふしぎね 消えたはずの
灰の中から 何故に燃える
ときめくこころ 切ない胸

別れを告げた 二人なのに

恋なんて むなしいものね

恋なんて 何になるの

これはどう見ても「恋」の歌としか読めませんね。しかしこの歌が作られた時代状況を明らかにしているサイトもあります。それは、朝日放送の「おはようコール ABC」というサイトにある、山本健治、通称ヤマケンの文章で、ヤマケンはこの歌を、アルジェリア独立戦争に結びつけています（「雑感・戦後日本の世相と流行歌（22）」）。

フランスが徹底的に弾圧して、解放闘争は苦難をきわめた。しかし、国を自分たちのものに取り戻そうという気持ちは、いくら弾圧されても、どこからか燃え上がってくる。こんな気持ちをエンリコ・マシアスが歌ったのである。

これを読むと、恋の歌だと思っていた歌の本当の意味のようなものがわかって、目からウロコ、のようになりそうなのですが、しかしこの説明は、歌全体の基調になっている「恋なんて むなしいものね 恋なんて 何になるの」という、後ろ向きの言葉と何かそぐわない感じが残ります。

実はヤマケンのこの時代還元は、途中まで正しくて、詰めが甘いのです。私はエンリコ・マシアスについて書いた文章の一つのマクラで、そのことを指摘したことがありますが、³⁾ その文章がインターネットで閲覧可能になって、その後いろいろなサイトで使われています。詳しくはそれをご覧いただきたいのですが、要点のみ申しあげますと、エンリコ・マシアスの生涯も歌も、確かにアルジェリア独立戦争に深く関わっています。しかしマシアスはアルジェリアを逃げ出したユダヤ人であり、独立戦争を遂行した民族解放戦線の側からすると「裏切り者」なのです。それでマシアスは以後ずっとアルジェリアに戻れないうでいます。数年前アルジェリア大統領から公式招待を受けてアルジェリア各地でコンサートを開催することになりましたが、それも結局直前にキャンセルされてしまいました。その怒り、失望が「旅」という別の歌に表現されています。⁴⁾ これもまた恋の歌です。ポピュラーソングの歌詞は、通常既成服のように誰でも手を通しやすいようになっていますが、この「旅」で歌われている恋

愛関係はきわめて特殊で、例えば最後の連の、「私はこの旅をあれほど夢見てきたのに狂った奴らが私の渡航を阻んでしまった」という箇所を自分のものとして歌える方は少ないと思います。しかしすでに述べた、マシアスの政治的な位置を考慮すると、この歌の「旅」とは、マシアスのキャンセルされた、故郷に戻る旅であり、「愛した人」とはアルジェリアであり、「狂ったやつら」とはマシアスが来ることに反対するキャンペーンを展開したイマームや、アルジェリア政権の一部の閣僚たちだとわかるのです。

マシアスを断罪する民族解放戦線の側にマシアスを入れてしまったヤマケンのもものすごいシツカカをやってしまったのですが、しかし最近見つけたブログはもっとすごくて、それは Google で「エンリコ・マシアス」と入れた時に最初に出てくる「Seesaa Blog」です (<http://oldiese.seesaa.net/article/37680745.html>)。後半部分は、先のヤマケンの文章のパクリで、前半部は、私が書きたいいくつかの文章からの切り貼りです。つまりこのブログは、ヤマケンをやっている私の文章とヤマケンとを、コピペしてつないでしまっているのです。まさにインターネットの本領発揮、というところでしょうか。

2. 「本当の訳」(?) からの距離

さて、この「恋ごころ」という歌について別の点からコメントしているブログもあります (<http://blogs.yahoo.co.jp/fujipyonne/9305890.html>)。これは、原詞と訳詞の違いに注目しています。この歌には前節で挙げた永田文夫訳の他、なかにし礼と岩谷時子の訳詞があります。永田となかにしの歌詞は「訳詞」と呼んでいいものなのか微妙ですが、このブログ *fujipyonne* が「原詩にかなり忠実な訳詞」と評している岩谷時子訳も、やはり微妙な生命体です。

ところで、エンリコ・マシアスには«*Ma dernière chance*»（「私の最後のチャンス」）という歌があつて、聴くと、何だジェリー藤尾の「遠くへ行きたい」じゃないか！と驚きます。これも元歌はフランス語か、というわけではなく、逆で、永六輔と中村八大の歌が先です。マシアスの歌は訳詞とは言えず、替え歌です。こういうことは向こうもやっているわけで、日本のお家芸、というわけではありません。

〈曲は維持したいが、歌詞はどうも…〉、という時に、替え歌になるのでしょうか。先のブログも書いているように、確かにその対象となる聴き手の嗜好に合うように「アレンジ」ということは考えられます。商業歌ですからマー

ケットの嗜好に合わせることは大事なことです。しかしそういう商売の戦略的な文脈だけではなく、やはり作詞家の個性、特性ということも重要になると思います。永田もなかにしも、示し合わせたわけではないでしょうが、ともに、「恋なんて」というネガティブな言葉を繰り返しています。岩谷を含め三人の訳者とも訳していませんが、タイトルは直訳するなら、「愛、それは無料」とか、「愛、それは無のため」となります。こう直訳的に理解した時、永田もなかにしも、「恋はむなし」という風になってしまったのでしょうか。すでに申しましたように、この歌にはきわめて特殊な恋愛関係が描かれているので、多くの人が袖を通せるように起承転結をつけようとした時、マシアスの原詞とはおよそ正反対の「恋はむなし」というアイデアが浮かびあがってきたのでしょうか。1960年代、二人の日本人男性訳者が期せずして「恋ごころ」に対して斜に構えてしまったのには、当時の男性マジョリティの恋愛観が反映していると言えるのでしょうか。女性の岩谷だけがそういう文脈の外に立つことができた、だから岩谷は恋心を韜晦する必要はなかった。こうした推測も十分可能だと思います。

さて、先のブログ [fujipyonne](#) は、「どれが良いとかってんじゃなくて、聞き比べるのが面白ってことなんだ」、と様々なバージョンの鑑賞を勧めていますが、そういういわば趣味の相対主義のような態度に正反対の態度をとるブログ（「港のシクロおやじ」）もあります。これは岩谷に対し怒っています。

原詩の内容がすっかり変えられている。訳者はこういうことをしてはいけない。

(…) 今後カラオケで愛の賛歌の岩谷時子訳で得意げに歌う人をみつけたら、待ったーと水を浴びせ、能書きをたれて阻止し 困ったオヤジとして嫌がられよう。でも美輪明宏はさすが、越路吹雪とは断然違う。エディット・ピアフの歌をわかっています。(…) 山口百恵もちゃんとした訳で歌っているではないか。(…) ではエディット・ピアフの歌に込めた意味をじっくりかみしめよう。本当の訳は下の方に出てきます。(http://mtclubminato.cocolog-nifty.com/blog/2009/11/post-96ac.html)

これは、「愛の讃歌」についてのコメントです。岩谷時子は非常にたくさんの歌を書いている作詞家で、その功績が認められて昨年度の文化功労者の一人に選ばれました。文化勲章の前段階ですね。「愛の讃歌」はその岩谷の代表作です。

最初に歌った1952年の越路吹雪にはじまって、ブログも挙げる由紀さおりのほか、たくさんのプロの歌手に歌い継がれ、⁵⁾ また、後で取り上げますように、岩谷訳以外にも様々なバージョンがあります。「愛の讃歌」はほとんど国民的歌謡の趣です。

さて、ブログ「港のシクロおやじ」が「本当の訳」と推奨する訳詞(<http://dogaeigo.blog118.fc2.com/blog-entry-138.html>)を基準にして、ひとまず、様々な訳詞を位置づけしてみましょ。まず沢田研二版(YouTube、訳者不詳)ですが、これは、恋の対象が明確ではなく、いわば恋に恋するような夢想の世界になっていて、翻訳ではなく替え歌と言うべきものです。また、ヴィッセル神戸のサポーターの歌う「神戸讃歌」(YouTube)も、「愛の讃歌」のメロディに載せた明らかな替え歌なのですが、特定の恋愛対象に対する強い愛情表現という点では、沢田研二版よりも「本当の訳」に近いと言えます。

ピアフの原詞は内容上三部構成にまとめることができ、最後、神の下で永遠の愛を獲得するという讃美歌です。フランス語では«le ciel»という一語で言われているところを、英語訳の中には«sky»と«heaven»に訳しわけているものもありますが、それは原詞をよく理解してのことでしょう。ところが神の下で永遠に結ばれるという重要な最後の段階を、岩谷時子訳は全く表現していません。それに対し山口百恵版(YouTube、訳者不詳)や加藤登紀子訳は「空」、長谷川きよし訳は「もう誰の手にも届かぬあの世界」(YouTube)、永田文夫訳は「とわのあの世」というようにやんわりと指示しています。こうした様々なバージョンに比べると、「神様」を明示する美輪明宏訳(YouTube)は際立っています。ブログの「おやじ」が、「さすが」と持ち上げるのも頷けるわけです。

しかし、美輪は自分の訳詞は朗唱するだけで、メロディーに載せる時はフランス語をそのまま歌っています。つまり実際に歌える歌詞としては訳していません。翻訳にあたって制約が少なかったことは明らかです。販売する歌の場合、買うのは匿名の多様な人たちで、多くの方はフランス語なんてわかりません。その人々に向かって、一応確定しているメロディーに載せて、特定の歌い方、特定の声の質、特定のファン層をもつ歌手を媒介にして、作詞家は「愛の讃歌」を届けなければなりません。語学の教室で翻訳するのはわけが違います。こういう難しい条件を克服して出来上がったすべての訳詞で「神」が消されている理由も、こういうところから来るのかもしれない。

「愛の讃歌」の中間部に注目してみましょ。ここは、愛する男の7つの仮

想の要求が歌われる部分です。どの訳も7つ全部はとらずに取捨選択して、脚色しています。加藤登紀子の「栗色にでも黒髪にでも」、山口百恵の「どんな恥でも耐え忍びます」、長谷川きよしの「陽でも月でも盗みもしよう」などはその例ですね。それに対し、祖国と友人に関わる箇所はすべての訳詞が採用しています。しかし原詞との距離では違いがあります。ピアフは、「renier」というきつい言葉を使っています。YouTubeのエディット・ピアフの動画への最近のフランス語の書き込みでも、詞のこの部分を受け入れがたいと思う人もいます（Maxime94000）。そういうところを、山口百恵版も加藤登紀子版も、さらにまたあの「本当の訳」も、「捨て」るとか「いらぬ」という訳をあてています。ほとんど誤訳とさえ言える不十分さですね。

ところで、岩谷時子の訳詞は1952年です。敗戦から7年、アメリカの占領が終わったわずか2年後のことです。そういう時期果たして、国を裏切るという言葉が日本人マーケットに送りこんでいいものなのか。岩谷にそういう配慮がなかったのでしょうか。実際岩谷は、はじめこの歌を黛敏郎の訳を見て「ちょっと怖いくらいの内容」だと感じたといいます。そして、日劇の演出家山本紫朗から「もっとポピュラーに」という要請を受けて、この訳詞を書き上げたとのことです。⁶⁾

「もっとポピュラーに」。恐らくこれが美空ひばり版（YouTube、訳者不詳）についてもあてはまるキーワードではないでしょうか。美空版は原詞からではなく、岩谷訳をベースにして作られたように思います。神の世界も政治の世界も出てきません。しかも岩谷訳から直接的な愛撫シーンを消しています。ただ、実際に歌われたものを聴くと、美空ひばりの方が圧倒的に艶っぽく聞こえます。美空ひばりの、シナを作っている歌唱法がそういう印象を産み出させるのでしょうか。歌詞それ自体は、男にすぎる内容で、保守的な家庭の未婚の女性も母親も、「いいわね、さすが美空ひばり」と聴けたのではないのでしょうか。こういうバージョンの作りもまた、美空ひばりのファン層への配慮、計算と見ることができるようになります。同じことが山口百恵版にも言えるでしょう。ブログの「おやじ」は、「ちゃんとした訳で歌っている」と書いていましたが、これは抱き合っているシーンを全く消し去っています。すべての日本語バージョンの中でこれが一番プラトニック・ラブです。山口百恵は「愛の讃歌」を、引退・結婚間近の時期に歌っているのです。そういう時にフィジカルなからみを前面に出したら、聴き手が不愉快になってしまうからこうしたのでしょうか。

3. 「彼女の日本語はフランス語に聞えます」 ?!

さて、ブログ「港のシクロおやじ」の、岩谷版への怒り心頭にも関わらず、YouTube では岩谷訳を歌う越路吹雪への讃歌はすさまじいものです。その中に次のような書き込みがあります。

凄いですね！彼女の日本語はフランス語に聞えますこんなに表現力のある人はもう出ないでしょうね (osakaoyajiking)

イロニーではないようで、岩谷＝越路版は翻訳とか翻案とか替え歌とかそういう日本語の次元にはなく、もうフランスに行ってしまった、というわけです。この越路讃歌はブログの「おやじ」による断罪と確かに正反対なのですが、しかし二人は案外近いとも言えます。というのは、「本当の訳」に満足する「おやじ」も、日本語の訳詞とフランス語の原詞をやはり一体化して、その間に隙間があること、ありうることは考えているようには見えないからです。

「人の心を種として」芽生えた歌の言葉は、多様な文化的社会的連関を引き連れて歌詞の中に位置を占めています。〈訳詞〉という微妙な生命体である「愛の讃歌」の場合には、その連関がいつそう込み入っています。例えば冒頭です。「港のシクロおやじ」の推奨する「本当の訳」では「青い空が落ちてきても」ですが、加藤登紀子はここを、「もしも空が裂けて」としています。空が落ちる、と、空が裂ける、皆さんにはどちらがぴったりするのでしょうか。私は加藤訳の方です。現代の私たちがふつうにもっている宇宙観、つまり近代自然科学の開いた宇宙観では、空は無限の空間であって、落ちることはないからです。星が落ちるのならわかりますね。実際、よく歌われている英語訳も、「太陽が空から落ちる」というように近代化されています。加藤登紀子は、空は裂ける、として落ち着けたのだと思います。加藤のこだわりが見えてくるところです。しかし、ピアフの原詞ではあくまで空は私たちの上に落ちてくるのです。ここでピアフは、フランス人がよく知っている言い回しを踏まえていると思います。それはアレクサンダー大王の故事に関わるものです。フランス人の先祖ガリア人が大王にお目通りを許された時、おれたちは大王だって怖くはないぞ、ということを示そうとして、「ガリア人は空が落ちることしか恐れない」、と強がってみせたという故事です。日本で言えば、聖徳太子の、あの「日出ル処の天子」

に近いものでしょうか。こういうところまで踏み込んで行くと、もう「本当の訳」もどれほど原詞に肉迫できているのか怪しくなりますね。ですから、「金髪」のところを「黒髪」にした加藤登紀子や山口百恵バージョンを、誤訳だと簡単に切って捨てるわけにも行かなくなります。

こうして、「本当の訳」からの距離ではなく、独立した日本語詞として読んでみることもとてもおもしろくなってきます。次の男女の恋愛の言葉をご覧ください。

男：僕は君といる時が一番幸せなんだ
僕は死ぬまで君を離さないぞ

女：あなたと二人で暮らせるものなら
なんにもいらない
あなたと二人生きて行くのよ
あたしの願いはただそれだけよ
あなたと二人

カップルの、熱烈な恋ごろの交換ですね。もうわかってしまったかもしれませんが、「男」の言葉は加山雄三の「君といつまでも」であり、「女」の方は越路吹雪の「愛の讃歌」です。そしてどちらも岩谷時子書いたものです。フランス語の原詞からの距離ではなく、岩谷の他の詞との距離をこうして測ってみると、これこそ一体化していると言えるのではないのでしょうか。

結び

最初に申しましたように、今日は書き込み的反応をすることが狙いですので、最後に、もう少し私自身の趣味を強めに出して終りたいと思います。

歌はメロディに言葉が載っています。日本語であろうとフランス語であろうと、その「言の葉」とメロディの関わりは決定的に大切だと思います。ピアフの歌は、すでに申し上げましたように、讃美歌です。フランスのキリスト教会やお城の中でよく天井画に出会いますが、青空の中に聖人や天使が安らいでいます。ピアフの歌はそういう天井画が示しているような、この世の世界とは異なる高い秩序へ上っていきます。第三部にはそういう上昇感、解放感がありま

す。言葉とメロディが相即して、最後本当に胸を打たれます。しかし、岩谷時子の詞は、その肝心なところで愛撫シーンが出てきます。男女の抱擁という行為に、広い、高い世界を写し出そうとしたのかもしれませんが、成功しているとは思えません。がっかりします。ブログ imhappy も書いているように (<http://im8p.blog25.fc2.com/blog-entry-41.html>)、岩谷の詞は迫力も深さもない「単純な歌」だと私も思います。しかし私にはそれが越路吹雪にはぴったりだとは思えません。私の印象はこのブログの方とはまさに逆です。岩谷訳の、裏のない、技巧のない、ストレートな思いの表明は、越路のあまりに作り過ぎた声、歌唱スタイルとはちぐはぐ過ぎて、私には滑稽に思えてしまいます。岩谷訳を歌った歌手の中では、岩崎宏美の歌唱 (YouTube) がぴったりしているように私には思えますが。それはいずれにしましても、どうぞ皆さんもインターネットを活用して、お好きなバージョンをお探してください。そして、もしお時間があれば、強力な岩谷=越路版をやっつける書き込みを試みてください。

注

- 1) 本稿は、2010年11月13日(土)、愛知芸術文化センターで開催された公開講座『J-pop 鑑賞術』における講演の原稿に修正を施したものである。
- 2) 本稿で引用するインターネット上のブログや書き込みは、すべて2010年11月11日現在で閲覧可能であったものである。
- 3) 「エンリコ・マシアスの歌うアラブ=ユダヤ共生」『20世紀ポピュラー音楽の言葉：その文学的および社会的文脈の解明』、平成16年度・17年度科学研究費補助金・基盤研究(C)研究成果報告書、研究代表者田所光男、2006年2月。
- 4) 詳しくは、前掲論文第1章を参照のこと。
- 5) 足立純子、あべ静江、岩崎宏美、大月みやこ、奥田晶子、岸洋子、クミコ、桑田佳祐、小林幸子、小柳ルミ子、斉藤和義、菅原洋一、玉置浩二、布施明、本田美奈子、美川憲一、由紀さおり、和田アキ子、他。
- 6) 田家秀樹『歌に恋して一評伝・岩谷時子物語』、ランダムハウス講談社、2008年、22—23頁。